フィールド(現場)からの風 ⑬③

宮澤守男

新年を迎え、厄払いして 本年の穏やかな一年を願う

1月初旬、安曇野市穂高の穂高神社に厄除け・八方除けの特別祈願に出掛ける。厄年(やくどし)とは、古来より人生において心身の節目や責務の重き時期で、事故、病気、被難など障害が起こりやすい年回りとされているものだ。平安時代には既に存在し、科学的な根拠も曖昧だが、根強く信じられている風習だ。陰陽道に起源があるとされているが、出典は定かでない。厄年のような考え方は、日本だけのものでなく、イギリスやスペインといったキリスト教国、エジプトやトルコといったイスラム教国にも同じような風習があると聞く。

わが家も、厄年の該当者が2名、高齢の厄年が1名。八方ふさがりが1名、家族5人中、4名が年齢に該当してしまう。人は、太古より自然がもたらす恵みと災いとに祈りを捧げ、常に将来への安寧と向上発展は、日毎、年毎、感謝と日々たゆまぬ努力の積み重ねにより、進歩した便利な時代を築いたと言っても過言ではありません。この繰り返しが厄年の根拠です。まさしく、人の統計学です。

これまでの歴史の中で、人々が災いを受けた年齢を参考に生み出された人間の知恵であり、その積み重ねが、厄年の一覧や男女八方ふさがりの年まわりや、穂高神社だけの高齢者の厄年を見れば、該当した年齢に、何か思い当たる事を感じる人も多いはずです。迷信は信じないと思う人でも、厄払いをして置かなくてはと思う人も多いはずです。

受け付けで祈願申込書に記載、交通安全・家内安全・事業繁栄・厄除・八方除など選択に苦慮する。祈祷(きとう)も普通祈祷と特別祈祷、祈祷料が、家族は減額になると巫女さんから説明を聞き、予定どおりの祈祷を申し込む。神殿には、おまもり(OMAMORI)説明看板が4か国語で表記、日本文化が注目されているのかと心和まます。

控室の壁には、「おまいりしおり」の説明看板、修祓・祝詞奏上・玉串拝礼・神符授与、その横には、玉串拝礼の仕方を説明。知っていそうで玉串の作法をどれだけの人が、知っているのだろうか。作法を知る人は少ないと言われている。渡された玉串を右手で持つように両手で受け取り、社殿の前の机にまで進み、両手で玉串の根元を持ち、真っ直ぐに立て、祈念して、根本を御神前に向けてお供え、2拝、2拍手、一拝するお参りが作法だ。

厄払いは、宗教の定義があるのでなく、どこで厄払いしたら、日々の安らかな、暮らしを本年もつづけられるのか、安心感を持つことができるものとされている。家庭によって厄払いをお願いする場所は異なっている。だからこそ、基本的な動作を説明する必要性もあるのだろう、恒例の参拝を終わり、帰宅への途に着く。何故か、心休まる心地にさせてくれる。

今年は、新たな思いで、いつもより気をつけて日常を歩もうと心に誓う。

今年の冬の積雪は、異常といっても過言でない。屋根の雪は、一気の降雪のためか、例年は自然に落雪しまう屋根雪も落ちぬままだ。集落内の排雪も、例年を上回り、作業に当たる関係者の苦労話も聞こえてくる。除雪用具も、希望の物は、なかなか買えず困っているとの声も聞こえてくる。家の周りも、高く積み重なった雪の重に。これからの雪対策が心配になる。1人暮らしの女性が心配そうに、倉庫に積もった大量の屋根雪を見つめている。尋ねると「例年お願いしている業者が、忙しさのあまり、対応できないとの返事」。「倉庫が壊れても仕方無い」と寂しそうに話す。「費用も高額、個人的に依頼すると、「時給3000円」も当たり前の現状だ。ここ数年屋根雪が落ときなかったため、屋根の、どこに雪止めがあるか、全く雪止めが無いのか、その記憶もはっきりしない。高齢者世帯では、より深刻だ。今後、更なる高齢化社会に向かい、豪雪地域での雪対策は益々重要性を増してくるだろう。

真夜中から、暗闇の中、生活道路を除雪する除雪車の音が聞こえる度、作業に従事している関係者、そして、道路を除雪した雪を堆雪場所に提供している皆さんにも感謝する毎日だ。雪国で暮らす知恵と地域の中で共に暮らして行こうとする意識を今後も継続してほしいと願っている。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

「おまもり」の外国語表示看板、日本の文化も大切な観光資源として再認識してみませんか